

昭和 37 年度

1962

新山岳部の発足について

昭和37年度から、伊那松本山岳部が発足することになりました。こゝにその成立の事情を説明したいと思います。

我々が農学部伊那山岳部と、文理・医学部の松本山岳部の統合を考え始めたのは、松本側に75名の新人部員を迎えたS36年6月からのことでした。特に松本山岳部にとっては、これは現実的な問題となって迫って来ました。これら新入部員の過半数以上が農学部であり、せっかく一年間、松本で山行を共にしても二年目には転出してしまうからです。上級部員の間では、この傾向が今後続く可能性の大である限り、数少ない上級部員は實際上、新人山行を続けることになり兼ねないという不満が持ち上って来ました。しかし、36年10月の奥又白では、伊那松本両山岳部がテントを並べて岩登りの合宿を行い、かつての仲間達のことゝて、かなりの交流を持ち得たのは幸いでした。以来、伊那山岳部の部員もこの問題について認識を深め、合同合宿をしようとする気運は盛り上がったのでした。

秀山のプレアルプス全山トレース(唐沢岳-霞沢岳)、春山の中央アルプス・ポーラーメソッド(池山尾根-空木岳-西駒本峰)と二回の合同合宿の成功は、確かに両山岳部統合の基盤とな

りましたし、これからの発展を約束するものがありました。

しかし、これらの合同合宿の成果は、手離しで喜べるものではありませんでした。それは合宿を合同で行う限り、次の問題が生れて来るからです。

○万一の事故の場合、責任の所在は、合同である限り明確でないこと。

○各々の部のLeader級の部員の考え方の相違が出る(その可能性は山岳部が夫々独立して存在する限りあり得る)とすれば、合宿それ自体が危険をはらむことになること。

○地理的な不便さが生れること。等がそれです。

この問題の解決策としてあるのは唯一つ、両山岳部の完全な統合でした。これについては両山岳部の人達の積極的な賛成を得て、統合後ともすれば生じ易いギャップは、毎週のリーダー会、及び部会毎月一度の総会等で出来るだけ埋めて行くこととし、ここに信州大学山岳会伊那松本山岳部が新たに発足することになりました。

才一回の総会は、37年5月12日、中央アルプス西駒農学部演習林ヒュッテで行われました。部則はかつての松本山岳部のものを一部修正して承認、36年4月の遭難後に出した松本山岳部綱領を伊那松本山岳部綱領とすることも決定しました。

昭和三七年度伊那松本山岳部前期(十月まで)の役員をお知らせしますが、O・B諸氏に於かれては新山岳部の発足を御了承下さって、より一層の御指導をお願いする次第です。

三七年度前半期役員

Chief Leader	西郡光昭	医進2
Sub Leader	寺田雅治	農林3
	小谷雅直	医専1
会計係	川崎 誠	農林3
	川治晴彦	農農1
装備係	宮内宣男	農農3
	松尾武久	文社2
記録係	小川永行	農林3
	浦 正直	工土1
O・B係	小林 庚	文自4
	出島五郎	農林3
新人係	松尾武久	(装備兼)

西郡 記

新人合宿報告

三七年度、新人合宿訓練は、横尾にベースキャンプを置いて五月二十七日から六月三日まで行いました。例年より遅れて入山したのは、前記の様に、新山岳部発足について色々問題があったためです。

今合宿は、新山岳部発足以来初の合宿として大きい意義をもつべきでしたが、参加人員四八名、内入部希望者二六名と大変な人数となりました。五〇名を一ヶ所に集めるより分散という声も聞かれましたが、才一回目でもあり、訓練のやり方に不安も感じていましたので、かなりもたもたもありましたが、横尾に決定したのです。

入・下山は両日とも雨に打たれての徳本越え、二日間の雪上訓練(ストップ・キックステップ)、槍、北穂、常念と連日のアルバイトはかなりきつい様子でしたが、全員良く頑張ってくれて、無事終えました。

結果的にみて、色々の問題はありますが、新人の雪上訓練としては単に型を学んだに過ぎない感があります(それ以上を始めから望むのは無理でしょうか)。

二年以上の部員の成長する機会を殆んど与えずじまいになってしまったのは残念です。特に一部の上級部員は屏風岩に意

欲を示していましたが、そのパートナーが出来ず、宙に浮いた
 感じで終ってしまったのは、本人にとっても気の毒に思うと
 同時に、全員が出来ただけ早く、同じような意欲に燃えたい
 ものだと感じた次才でした。

尚、雪上訓練は、夏の定着合宿にも取り入れて、技術のマ
 スター、研究に努めたいと思っています。

西郡 記

OB会員住所録

伊古美立雄	24	医	松本市寿区 松本精神病院 信大医戸塚内科
飯田 太	26	医	名古屋市千種区 唐山町1-55 信大医丸田外科
上田 尚	28	医	松本市和泉町2 由比ヶ 浜方 信大医 星子外科
小栗 恒人	28	理	松本市北上横田町 下枝方 全 深志高校
鎌倉 通敏	28	全	松本市宮崎町32 松尾方 全 深志高校
木下 哲雄	28	全	松本市蟻ヶ崎北 全 深志高校
小松 英夫	28	全	東京都杉並区2-29 高橋方 矢野経営研究所
佐野 卓立	28	全	群馬県高崎市山田町37 富岡高校
柴田 治	28	全	松本市笹賀区 信大医 第一解剖
清水 一治	28	全	長野県中野市中野1708 中野高校
塚本 晶造			25年8月28日木曾駒岳にて遭難

烟中 滋			28年5月3日穂高天狗岳にて遭難 当時4年生
小松音一	29	理	大阪府南河内郡登美立町149 茨城県水戸市 国鉄自動車営業所
田中 哲		医	松本市芳川区野溝
上条俊之	30	全	松本市丸ノ内 信大医丸田外科
青山俊吉	30	理	栃木県足立市丸山町687 足利女子高校
田中秀男		全	
有吉 敬		全	日本放送協会 高山市大新街5-68
坂田英明	31	全	岐阜県厚生連 久美愛病院 群馬県高崎市井野町石畑56 渋川高校
樋口清明	31	全	名古屋市中種区唐山町1-21 木村刃物KK
平沢行哉			30年12月29日前穂A 7-1入にて遭難 当時4年生
木村泰治			新潟県長岡市坂之上町2-915
見島 勲			31年5月30日粟穂にて遭難
飯田忠重	32	医	松本市中原町 信大医 松岡外科
矢野想之輔	32	全	京都市東山本町15 京都才一日赤病院
小野節郎	32	全	信大 星子外科
木内宗甫	32	全	信大 耳鼻科
菊地俊次	32	全	信大 耳鼻科
関口庸夫	32	全	
当山輝夫	32	全	東京都目黒区自由丘309 東京医科歯科大学
原 正守	32	全	松本市 信大医 小児科
福村 豊	32	全	東京都中野区江古田2-70 向遠章乃

山岸	秋光	32	医	三井厚生病院内科 東京都杉並区阿佐谷1-831
岡田	要	32	理	墨田区江東橋 墨田病院 大阪市西淀川区西淀町508 中山剛業大阪支店
永田	武史	32	全	信大薬理
公平	宏清	33	医	
大矢	清	34	医	信大 丸田外科
金松	直也	34	全	信大 精神科
小林	瑠	34	全	
茅野	文利	34	全	信大 丸田外科 松本市鷹匠町 信大才一病理大学院
中島	克	34	全	東京都太田区小林町296
窪田	文夫	34	理	長野市 信濃毎日新聞長野本社
畑仲	成美	34	全	東京都 文園高校
塩谷	貞夫(旧姓井上)	34	理	名古屋市中村区若宮町1-2
奥秋	仁	35	医	信大医 松岡内科
猿橋	孝雄	35	全	松本市岡田94
神保	長三	35	全	信大医 精神科 松本市鷹匠町
小原	武	35	理	信大 松岡内科 岐阜県多治見市陶元町95-2 伏原紡織kk
水野	久人	35	全	東京都目黒区緑丘297 波多野方
坂本	正邦	36	医	プリンス自動車kk 阪大レントゲン科
小林	喜芳	36	理	名古屋市中区御幸本町通9-8 高千穂交界kk名古屋支店
中村	利夫	36	立	同上
片岡	格	36	工	東京都太田区駒込町4-56 池田建設 駒込寮 (工事現場にいる可能性大)

福田 敏男 36 文 東京都府中市四谷亭天王2879の3
三井生命中河原寮内
小口 善久 36 全 千葉県柏市豊四季中原810
戸田建設柏寮内

住所及び勤務先変更の際は下記の住所へ御一報
下さる様、お願い申し上げます。

松本市黒町 信州大学文理学部内

信州大学山岳会伊那松本山岳部宛

37年度年間計画(37.7-38.3)

◦夏山合宿

定着 { 剣 (真砂沢又は二俣) } 7月中旬 1週間
 { 涸沢 }

縦走 { 南アルプス全山 (駒-光)
 { 立山-後立山 (剣-平-白馬) } 定着終了後
 { 後立山 (北穂-白馬) }

奥又白定着 8月8日-8月17日

◦秋山合宿 10月初旬 岩と沢を中心とする

剣, 涸沢又は奥又, 後立山の岩

南アルプス縦走 (夏山不参加者)

◦冬山合宿 12月中旬-1月初旬

新人+上級部員 (柵池, 遠見, 八方等から選ぶ)

中上級部員 (後立山-鹿島, 不帰, 五竜, 白馬)

◦春山合宿 3月初旬-25日間前後

白馬-鹿島槍極地法 (に主力を注ぐ)

北岳中心の縦走

裏銀座縦走

> (余力があれば行う)

責任者 { 秋山 - 寺田
 { 冬, 春山 - 寺田, 西郡
 { 夏山 - 小谷(定)
 西郡(縦)

奥又白夏期合宿のお知らせ

本年も恒例の奥又白岩場合宿を、8月8日-8月17日に行いたいと思います。先輩方には出来るだけ参加されて現役部員の御指導をお願いします

尚、5日間以内の参加を希望される方は、各自、1日150円相当の食料を持参願います。

期間 8月8日-8月17日

食料費 1日 150円

装備費 5日以内 200円

10日以内 400円

参加される方は、8月5日迄に(Geldを添えて)

松本市里山辺北小松 花崎一雄方

西郡光昭

宛御連絡下さい。

谷川岳 (昭和35.10~36.10の記録と感想)

34年卒 金松直也

どういう運のめぐりあわせか急に群馬へ行くことになったのが昭和35年の10月だった。まだ新人の頃、5月のハケな岳で東京のガス会社の山男から谷川岳というのがある。りいける山だというやうなことをきかされたことがある。その時はあまり関心をもちなかつたが上州に行くことがきまったら微塵も水が重要な存在となつてしまつた。幼い年しかいふことができないのだし勉強にいくという柄にもない使命をもつていては余り期待はかけられなかつたのだが登れるだけは登りたいと思つた。

以下簡単に記録と感想をつづる。

★35.11.6 何はともあれ谷川岳がみたかつた。高崎午前2時40分の汽車で土合駅に5時に立つ。相にく暴風雪注意報。ポン友の小林君と一諸ではあるし横なぐりの雪の中を登る。視界は全くきかなかつたが頂上を足でさゆつた。天神峠をおりると頂上はガスだが下は風が強いで紅葉が美しい。日いままないたぐらと幕岩のコントラスト素晴らしい。谷川温泉で疲れをおとす。

土合(6.10) - マチガ沢出合(7.00) - 溪雪小舎(8.00) - (8.15) - 頂上の小舎(9.45) - (11.00) - 二段(13.30) - 谷川温泉(13.00)

★35.11.20 H君と巖崗新道より頂上を経て蓬峠へぬける。土合では雨途中から風雪となる。この日従走したのは我々だけ。踏跡のない雪面をゆくのは困難だが楽しい。寒いので休んだのは武能岳頂に5分位だけ。あとは芍薬?にまがせてとばす。11時に蓬峠についたのには二人ともポカポカとしてしまつた。

土合(5.10) マチガ沢出合(5.45) - (6.05) - トマの尾(8.00) - 1の倉岳(9.00) - 茂倉岳(9.15) - 武能岳(10.30) - (10.35) - 蓬峠(11.00) - (11.45)

★36.2.18 雪の谷川岳へ行ってみようということになつた。H君と二人で日帰りしようと思つたのは素人の浅はかさ。途中他パーティーの2名と合流。風雪の中1時間ラッセルしても米とす、まず、西黒尾根つきあげ道下では合流パーティーの1名は立ちながら眠つていた。溪雪小舎は雪の下。頂上などはとても。退却する。上越の雪は重くてしめっぽい。そのく上り刀で首まで沈みやあがつた。

土合(3.30) - マチガ沢出合(5.00) マチガ沢を登りベンチより西黒尾根へ直上 - 稜線(11.00) - 溪雪小舎(11.20) - マチガ沢出合(12.00)

★36-3-19 HとSと3名三月と二月とではかくも違うものか。他に何パーティーも入っているせいだが、ラッセルはヒザマテ。嘘の様に頂上に立ち一の倉岳頂に雪洞をほる。四国目で又つと谷川岳の姿をみる。快晴。夕方より曇。土台(3:05) - 滝雪(7:20) - トマの耳(9:00) - ノ倉(12:30)

★36-3-19 雪洞を出発し茂倉岳を経て達峰に向おうとしたが風雪激しく視界きかず茂倉岳より引返す。肩の小舎もみっからなかった。雪洞(8:00) - 茂倉岳(8:20) - (9:10) - ノ倉(9:30) - オウの耳(10:30) - エ台(13:05)

★36-4-30 一の倉沢南稜。初めて入る一の倉沢だから代表的なルートを登ろうと思った。四月から五月の一の倉沢。びっきりなりに落ちる雪崩。雪崩をみて、また沢の季節ではないと思つた。昔くは衝立周回しか登ることが出来ないう。滝沢をさぐり速さでおちていっただよもった雪の一团、全く壮観の一語につきる。鳥帽子奥壁から男、死ぬ前にうたった二人ぼ、ちのヨーデラーはいつまでも耳に残った。南稜登攀中ストラブ末端の遺体が終始みえて憂うた。南稜はホルドは細かいが岩が堅く恰好の高き感あり快適。上部で6ルゼへ逃げる正常ルートを取らず直登。アラビナ不足で困難する。オーバハング気味の真すぐの壁で鳥帽子奥壁の上部。

土台(5:00) - ノ倉出合(6:00) - 南稜テラス(7:30 ~ 8:40) - 登攀終了(11:05) - (11:45) - ノ倉岳(13:00) - トマ(14:05) - 土台

★36-6-18 単独にてノ倉4ルンゼを登ろうと思った。雨激しく本谷バンドで引返す。雨の中央稜テールリッジは悪い。衝立岩がよそよそしかった。銃撃事件のザイルはまだそのまゝ壁にはりっいている。

土台(5:05) - マチガ沢出合(5:45) - ノ倉(6:05) - 南稜テラス - 本谷バンド

★36-7-29 H君とニルンゼー滝沢上部(ブルンゼ)を登る。快晴比較的楽なルートだけに心は軽い。中央稜末端の雪渓俺達があつてから5分と立たぬうちに轟音を発して沈没。滝沢上部はつまらない。今度はAルンゼを登ろうと思った。

土台(5:05) - ノ倉出合(6:00) (6:25) - 南稜テラス(7:45) - 本谷バンド(7:50) (8:00) - ニルンゼザッテル(10:15) - 広河原(10:20) (11:05) - 稜線(11:55)

★36-9-10 単独にてノ倉一の沢。この日2回死んだことになる。反省。沢登りの高巻きは危険であるということ。もう少し樫木の根が弱い俺が岩を蹴つてはえ松をつかむタイミンが悪かったら5-60米下の河床で俺の自体は冷たくなつたらう。余リケチケチすべきではないということ。遇然高崎山岳

会パーティと最後の悪場で一緒にになり助かった。もっとまっ中
が横でカラビナの三百圓はもったいななどいゆぼ役は
宙にさがるようなことはなかった。ザイル降して貰った
ので切角苦労してとったカラビナを遊呈してしまった。
土合(5:10)ーノ倉出合(6:00)ーノ沢出合(6:15)ーシンセンのコ
ル(11:00)(11:30)ーマチガ沢出合(1:00)

★30:10:15前回は不明朗な登り秀故もう一度す、きりレーゲル
通りに登ろうと思った。H君と再びノ沢を訪れる。前田中
心算で左岸を捲いて悪かったので右岸をまく。ハーケゴのベ
タもさあり。身体が重くてもちあがらず予想外の時間を喰う
。高巻いたのはミ>だけアップで河床に立つ。時間は前回の
1.5倍かかった。

土合(5:20)ーノ倉出合(6:15)ーノ沢出合(6:30)(6:45)ーシンセンの
の科尔(13:10)(13:15)ーマチガ沢出合(15:15)

谷川岳はまだ少ししか登らないのでその本当の味がわからな
いかもしれない。ニ・三の徒走路と一ノ倉沢の一部だけしか知
らないので何も言えないかも知れない。だが一ノ倉沢だけ
について私の感想だけを述べるならば谷川岳は登る山だ。気
に角穂高はそこにいて楽しい。あのなっ少しはえ松
や岩の匂いは谷川では味わなかった。それは日帰の山行のせ
いかも知れない。衝立岩周辺を除けばあまりきり立っている
とも云えないがそのくせツルツルヌラヌラしていていっでも
安心できない。天候も不安定だからゆくりとしていれない
焦燥感があるのかも知れない。こわい山である、こんなこと
を言っでは悪いが年取った小婦のように小意地が悪い。だか
ら谷川は何となく征服した山である。登りに登ってやりた
い。いくら嵐や風や雪で執要な抵抗を試みようとするスキを
ついて登ってやりたい。登ることだけに魅力がある山である
。以上は私の感じたままである。

この様な紀行文をお送り下さればさいわいと思いま
す。

女とアンガイレンしたとき

小松 英夫

女と……と言っても、あっちのことではない。こっちのことである。未だチョンガーの誇り高き小生があっちのことなど書けようはずがない。もっと素直に書こう。年齢三十一、オンナノコと二人だけで岩登りをした経験はたった二回しかない。滝谷のノルダークンテ、一ノ倉の第三ルンゼがその光榮に浴したルートである。滝谷の時は、野次馬多き中を本物の朝酒一杯で歓呼の聲に送られて北穂小屋を飛び出した。未成年者のダンプカー運転みたいなものだった。それに反し、谷川の時は本物である。このホンモノの方を書こう。

電話連絡幾度か、ひそやかに二人だけで夜の上野を突いたのである。明日にも山には初雪がこようか、という初秋の或る一日……と書けばメロドラマになってしまう。

たしかに風は冷かった。踏みしだく落葉はすっかり霜枯れて、逆行する沢の水飛沫も軽金属の踊りだった。彼女のベレーがゆっくり右左に揺れながら、残りの赤い実をつけたななかまどの影にかくれる……というわけで、とにかく珍しく人の少ない一の倉へ入ってしまったわけだ。件の情況次の如し。

彼女—さる女子大山岳部OG。年令当時22才、身長1米?、バスト?、ヒップ?、---、やゝ瘦型なるも筋肉しまりてスタイル良好。容貌その小道具平凡なるも理知的配列にして端麗なり。黒のナーゲル、黒のトレンカーに黒のカッターシャツ、黒のベレーとオール黒なるも胸の小高きにシルバーのグローブあり、素首もとには金の細きネックレスありき。幼少の頃、実兄谷川岳にて遭難死。事来、父に伴われて山麓の碑を詣でること幾度か、長じて山好きとなれり。為にいささかブラザーコンプレックスの気味あらん。

てなわけで、このお嬢さん、小生を兄とXX、△△とも〇〇していたのかも知れない。これは蛇足としても、とにかく二人は滝沢スラブを見下すテラスに肩を並べて座った。ザイルを使って岩登りすることなど生れて初めて、いさゝか緊張で顔が引きつっている。この瞬間小生は彼女から800%位信頼されていると確信した。見散するヘルメット野郎には「仲良きことは美しく」「アイシアッテル二人は一人」に見えた事だろう。しかも、「アイシテル」なんて空しいことを素振りにすら示さなくてもだ。

これからが本番。黙ってザイルを出せばよい。一端でかっさり相手を荷造りしてやっても、全く任せ

きり。これからがいい。早めに短いピッチでハーケンを打ち、カラビナのはずし方を教えると、全身でうなずいている。後は勝手にスタコラ登って、足元の岩影から一生一代空前絶後の真剣さと信頼の固りになった顔がひょっこり現れ、そして小生の顔を発見すると一瞬ニコリッとする、それを観賞するばかりだ。セルフビレイを確め、又先に立つ。

こんな時、かりそめにも「しっかりジッヘルしてくれ」だの「落ちるかも知れん、よろしく」なんて言うてはならない。小生はこれをして失敗した。数ピッチ重ねて、やゝ慣れたなと思った頃だったろうか。落石に会った。これは無事避けたけれど、その直後松高カミンみたいな所を登る時にこれを言ったものだ。彼女あわてて叫んだ「ちょっと待って！ちょっと降りてきて！ちょっと-----」

後日、彼女は告白した。「あの時は本当にこわかった。あなたの体がほんとに岩のかたまりに見えてきた」

その岩のかたまりは、「エハ、、、」と笑っただけで登ってしまった。今にして思えば修業の足らなさである。本当は二つ返事でバックして来て「大丈夫さ」と彼女をギュッとやっちゃえばよい。

ハーケンを打った。彼女が、である。打ちたいと言うからバカでかいテラスで、こっちは枯草の上に昼寝

しなから背中の壁に打たせてやった。「カチ、……トントン」その音は仲々可愛らしいものである。「くそ、80円無駄にしゃかって」なんて決して考えるはならないひとときである。大学四年間、縦走やらスキーやら人並みにやって、世間からは山好きな変わったお嬢さん、と言われていたらしい彼女でも、30分近くかかってどうやら一本のハーケンが壁に収まった。ここで小生は又も何度目かの失敗をした。その満足の結晶みたいなハーケンを、一撃で叩き落してみせたからだ。彼女の心の記念碑として、メチヤメチヤに叩かれたハーケンの頭に、そっとクチズケなどしてやって（この時、あくまでさりげなく、そしてタイミングよく——何故なら早すぎると30分も叩いていたから、ファイヤークリスになる危険あり）そのまま、壁に残してやるべきだった。又しても我がムードの乏しさを痛感。

登りつめた稜線はのどかだった。這松の中にもぐって、キジを打った時は全身からそれが出てくるような錯覚を起したものだ。その間に彼女は、手際よく三つ道具を収め、代りにアルコールバーナーでコーヒーなど作ってくれていた。

すたこら先に立って下山する彼女の後にくっつきながら、ビールの泡ばかり想い続けていた。帰宅の車中で言ったものだ。「又、岩登りに来ようか」

「あかんない」俺もわからない、オナノコと一緒に
岩登りは。

彼女は上野に着くやいなや電話をかけた。「オカア
サン、オフロワイテル？、チョットツカレチャッタ」
こっちも癒れた。アイスルことは疲れることとみつけ
たり、だ。但し、契約のアンザイレン、あっちのことは知らない。

《 完 》

中京だより

樋口清明

五月の連休は春闘の後付末で山へも行けなかった。
小原、久田の両君は中京支部の装備を担って上高地へ
入り、雨にたたかれたながらも現役の山田君にハッパを
かけられ夕タミ岩尾根を攀ったとのこと、小原先生の
感想を求めたら“現役のシュウは鼻息が荒いワネ”と
の事、彼もはやO・Bの部類に属することとなり申した
訳か。

さて五月下旬、落ち着いた天候をねらって、高校時代の友人にさそわれ、上高地入りする。福島から堺峠越

しに沢渡につくと、松電のバスから小栗先輩が顔を出し、「よく山へ来るナ」との御挨拶、イヤハヤこちらからは年に二回の上高地入りかやっどだのに一と考えてみたら一昨年だったかやはりこの季節バスでお会いしたのか彼の言を生んだかと判る。

木下先輩にも西縁屋でお会いする。僕はたった二日の休みだから立ち話もそこそこに別れてしまったのは残念だった。

久し振りに五月の槍穂連峰を眺めんものと徳沢園から長堀山へそして蝶ヶ岳の小屋へ泊る。絶好の快晴で、ひねもす夜汽車の睡眠不足になやまされ、頭の方から脚の方までノタリ、ノタリの山旅だった。但し眺望は素晴しかった。蝶の小屋は冬期小屋だけで軽装備で来たのでエッセンもつましくシュラフもなくあまり快適とも云えなかった。明くればいまにも降りそうな高曇りの空の下を富士を前方にみながら大滝に出、例の長い沢、いまだ早春といった芽生えの林を徳沢園に帰った。

縁屋へ着いたのは12時半、雨は明神あたりから降られ、思い切りのいいお天気なので1時20分の福島行のバスで帰宅する。

翌日の新聞は崖崩れにより昨日は上高地線不通とある。会社へ出てもばれる心配なく、欠勤理由は、

ブラジルから友人が来て名古屋見物で忙しかったから
と言いつけ、ちなみに一緒に行った友人がD海運の一
等航海士で南米の女の子をことこまかに仕込んだのが
ネタになった次第。

さて六月二日、山岳部の中京勢が会食した。塩谷、
久田、小原、小林、僕とその他二三だが、中村一夫君
は所用で欠席された。

小林喜芳君も名古屋へ就職されお目出度い限り。彼
も新入社員教育を終え、優秀なる社員として社会への
知識欲と愛社精神に燃えているところを見れば“将来
の中京財界の重鎮たることを断言出来る”と心強く
感じた次第、ではこの辺で今回の便りを終る。

